

Arnold Dreyblatt The Orchestra of Excited Strings

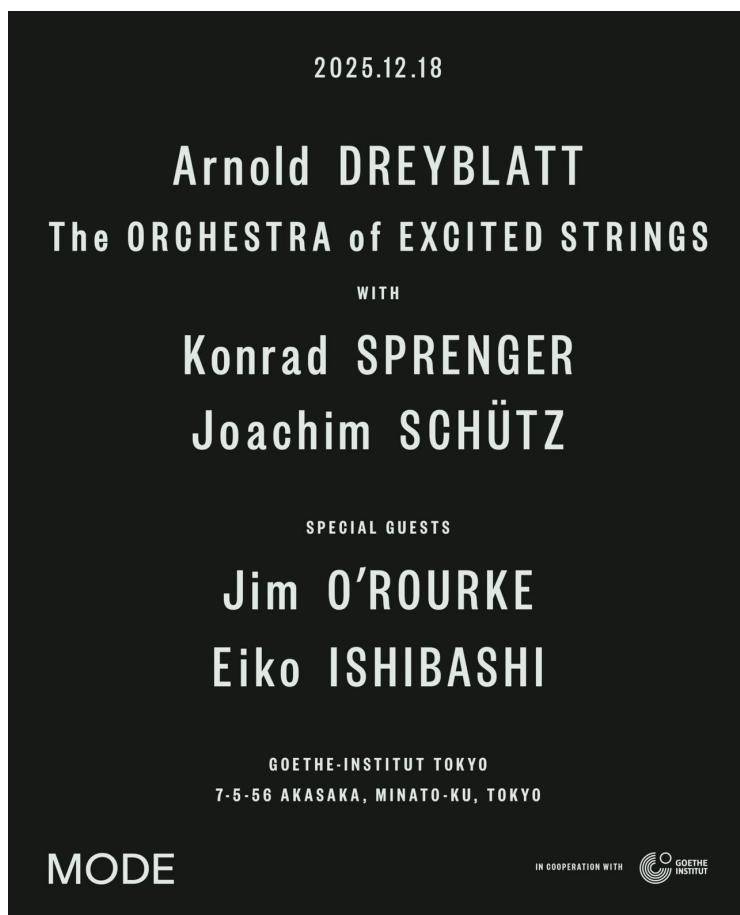
WITH
Konrad Sprenger / Joachim Schütz

SPECIAL GUESTS
Jim O'Rourke / 石橋英子

12月18日(木)、実験音楽、オーディオビジュアル、パフォーミングアーツを紹介するプラットフォーム
MODEが年内最後のプログラムを緊急発表。

ミニマル・ミュージック界の巨匠Arnold Dreyblattによるアンサンブル・プロジェクト
『The Orchestra of Excited Strings』のパフォーマンス・プログラムを開催。

Arnold Dreyblattを中心に現アンサンブルメンバーでベルリン拠点の作曲家／楽器創作者の
Konrad Sprenger、ギタリスト／即興音楽家のJoachim Schützに加え、
スペシャルゲストにDreyblattの長年のコラボレーターであるJim O'Rourke、
さらに石橋英子を迎えた特別編成でパフォーマンスを披露。



実験音楽、オーディオビジュアル、パフォーミングアーツを紹介するプラットフォーム「MODE」は、2025年12月18日(木)、
東京・赤坂のゲーテ・インスティトゥート東京にて、Arnold Dreyblatt(アーノルド・ドレイブラット)によるアンサンブル・プロ

ジェクト『The Orchestra of Excited Strings(ジ・オーケストラ・オブ・エキサイテッド・ストリングス)』を発表します。

『The Orchestra of Excited Strings』は、1979年にニューヨークで設立され、編成の変化や一時的な活動休止を経ながらも、現在まで独自の的方法論を更新し続けてきた、Dreyblatt主宰のアンサンブル・プロジェクトです。

本公演では、Arnold Dreyblatt、現行のアンサンブルメンバーであるベルリン拠点の作曲家／楽器創作者 Konrad Sprenger(コンラッド・スプレングァー)、ギタリスト／即興音楽家 Joachim Schütz(ヨアヒム・シュッツ)に加え、Dreyblattの長年のコラボーレーターであるJim O'Rourke(ジム・オルーク)、さらに石橋英子(Eiko Ishibashi)をスペシャルゲストとして迎えた、計5名の特別編成アンサンブルによるパフォーマンスが披露されます。

本公演はArnold Dreyblattにとって、2017年の東京公演(SuperDeluxe主催)および北九州公演(現代美術センター CCA 北九州主催)以来、8年ぶりとなる来日公演です。Dreyblatt、Sprenger、O'Rourke、石橋の4名が同じステージに立つのも同年の公演以来で、極めて貴重な機会となります。

またDreyblattは、2023年にArnold Dreyblatt & The Orchestra of Excited Strings名義での最新作『Resolve』を発表し、2025年11月21日にはエクスペリメンタルバンドHorse Lords(ホース・ローズ)とのコラボレーション作のリリースも控えており、活動の流れとも響き合う、まさに注目すべきタイミングでの来日となります。

本プログラムは、ドイツ連邦共和国の文化機関として、文化交流、教育、社会的なテーマに関する議論を国際的な文脈で振興し、ドイツ語学習とドイツ語教育を推進するゲーテ・インスティトゥート 東京による協力のもと開催されます。

■ Arnold Dreyblatt



Arnold Dreyblattは、ニューヨークのミニマル・ミュージック・シーンの第二世代目を代表する作曲家の一人です。Pauline Oliveros(ポーリン・オリヴェロス)、La Monte Young(ラ・モンテ・ヤング)、Alvin Lucier(アルヴィン・ルシエ)に音楽を、Steina & Woody Vasulka(スタイナ & ウッディ・ヴァスルカ)にメディアアートを師事。Arthur Russell(アーサー・ラッセル)、Julius Eastman(ジュリアス・イーストマン)、Tony Conrad(トニー・コンラッド)といった伝説的アーティストたちと共演してきました。弦を打楽器的に鳴らす独自の楽器「Excited Strings」と、脈動するリズムや倍音構造を軸にした作曲手法により、身体に直接作用する独自の音響世界を築いています。1980年代以降はベルリンを拠点に制作を続け、1990年代にはJim O'Rourkeらの世代から再び注目を集め、2010年代にはMegafaunaとのコラボレーションなどを通じて活動の幅を拡大。2023年にはArnold Dreyblatt & The Orchestra of Excited Strings名義での最新作『Resolve』を発表し、2025年11月21日にはHorse Lordsとのコラボ作のリリースも控えるなど、現在も精力的に活動を展開しています。

■ The Orchestra of Excited Strings



『The Orchestra of Excited Strings』はDreyblattが1979年、ニューヨークにて自身の作曲作品の発展と演奏を目的に結成したアンサンブルです。アメリカ各地で活動したのち、1984年にベルリンへ拠点を移し、国際的文化センターであるKünstlerhaus Bethanien(キュンストラーハウス・ベタニエン)のレジデンス作曲家として、新たなメンバーでアンサンブルを再編成。欧州各地のフェスティバルや美術館で演奏を重ね、Shelley Hirsch(シェリー・ヒルシュ)やAndy Statman(アンディ・スタットマン)といったアーティストたちとの共演、前衛音楽家John Zorn(ジョン・ゾーン)主宰のレーベルTzadik(ツァディク)からのリリースなどを経て活動の幅を広げました。アンサンブルは1997年に一度解散するも、2000年にBang on a Can All-Stars(バング・オン・ア・カン・オールスターズ)のメンバーやマサチューセッツ工科大学の学生たちとともにニューヨークで再結成。2009年からはKonrad Sprenger、Joachim Schütz、Robin Hayward(ロビン・ヘイワード)と現行編成を結成し、2019年には実験音楽家であり、レーベルBlack Truffle(ブラック・トリュフ)の主宰でもあるOren Ambarchi(オーレン・アンバーチ)も参加しています。

■ Konrad Sprenger / Joachim Schütz / Jim O'Rourke / 石橋英子

Konrad Sprengerは、ベルリンを拠点に活動する作曲家、音楽プロデューサー、アーティストであるJoerg Hiller(ヨーク・ヒラー)の別名義です。長年にわたり、Arnold Dreyblattをはじめとするニューヨークのミニマリズム・ミュージックのアイコンたちとコラボレーションを重ね、パフォーマンス、作曲、サウンド・インスタレーションの制作、楽器の創作など、幅広い活動を展開してきました。近年では、コンピューター制御によるエレクトリックギターの創作・演奏や、2022年1月にCTMフェスティバルで発表された大規模なサウンド・インスタレーションなどで国際的に高い評価を得ています。

Joachim Schützは、ドイツ出身のギタリスト、インプロヴァイザー、プロデューサー、レコーディング・エンジニア。1990年代初頭、ドイツのアンダーグラウンドおよび実験音楽シーンに身を置き、これまでにEllen Fullman(エレン・フルマン)、Pantha du Prince(パンサ・デュ・プリンス)、Phil Niblock(フィル・ニブロック)など、ジャンルを越えて多様なアーティストたちとのコラボレーションを重ねています。

Jim O'RourkeはArnold Dreyblatt、Konrad Sprengerの双方と長年にわたる交流を持ち、『Sonic Youth(ソニック・ユース)』、『Wilco(ウィルコ)』、『Gastr del Sol(ガスター・デル・ソル)』といったプロジェクトでアメリカのポストパンクシーンを牽引し、マース・カニンガム舞踊団の音楽やTony Conrad、Christian Wolff(クリスチャン・ウォルフ)などの作曲家との共演に加え、日本国内でも数多くのアーティストとのコラボレーションを手がけてきました。

石橋英子は日本を拠点に活動する音楽家。Drag City、Black Truffle、Editions Mego(エディション・メゴ)といったレーベルより作品をリリースしています。2020年にはシドニーの美術館『Art Gallery of New South Wales』にて開催された展覧会のための音楽を制作し、『Hyakki Yagyo』としてBlack Truffleよりリリース。2021年に濱口竜介監督作『ドライブ・マイ・カー』の音楽を担当し、2022年にはLP『For McCoy』を発表。同年よりNTSのレジデントに参加し、2023年には濱口監督作『悪は存在しない』およびサイレント映画『GIFT』の音楽を手がけ国内外でツアーを敢行。2025年3月にはDrag Cityより7年ぶりの歌のアルバム『Antigone』をリリースしました。

【公演概要】

Arnold Dreyblatt & The Orchestra of Excited Strings

- 公演日時:12月18日(木) OPEN 18:00 / START 19:00
- 会場:ゲート・インスティテュート 東京(東京都港区赤坂7-5-56 [MAP](#))
- チケット:¥5,500 ([e-plusにて販売中](#))
- 出演者:Arnold Dreyblatt / Konrad Sprenger / Joachim Schütz / Jim O'Rourke / 石橋英子

公演の詳細は[MODE公式インスタグラム](#)をご確認ください。

【出演者プロフィール】

**Arnold Dreyblatt(アーノルド・ドレイブラット)**

Arnold Dreyblatt(1953年ニューヨーク生まれ)は、作曲と音への革新的なアプローチを築いてきた、現代音楽における特異な存在である。彼の音楽はミニマル・ミュージックや実験音楽の系譜に位置づけられながらも、共鳴、倍音、そして微分音を独自の方法で探求することで、他に類を見ない音響世界を創り出す。

Dreyblattは、作曲と音楽実践の領域で独自の道を歩んできた。自ら楽器を制作し、演奏技法と調律体系を構築することで、音の構造そのものを新たに定義している。ニューヨークにおけるミニマル・ミュージックシーンの第二世代目に属し、Pauline Oliveros、La Monte Young、Alvin Lucier に音楽を、Woody & Steina Vasulka にメディアアートを学んだ。

彼の作曲プロセスは、倍音列の探究に深く根ざしている。倍音の純正比率に基づく独自の調律システムを駆使し、既存の音律では到達できない響きの構造を築いてきた。特定の音響条件に応じて自ら楽器を制作・改造し、固有の共鳴と音色を生み出すこの手法は、彼の作品の核心を成している。こうして生まれる音は、従来の楽器では決して得られない、豊かで多層的な響きをたたえている。

彼の音楽は、ドローン、反復、増幅、打楽の要素の使用によって特徴づけられ、静止と運動が交錯するような感覚を生み出している。リズム構造はしばしば複雑で、脈動するようなドライブ感を伴うパターンが作品全体に動的なエネルギーを与えている。アメリカのミニマル・ミュージックの作曲家たちの中でも「よりロクック的」と評されることが多く、彼の超越的で高揚感に満ちた音楽は、ソロ活動および The Orchestra of Excited Stringsとしての活動を通じて、熱狂的なアンダーグラウンドの支持を獲得している。

Dreyblatt の音楽は、Bang On A Can All-Stars、Great Learning Orchestra、Pellegrini String Quartet、Crash Ensemble、Horse Lords、Robert Black、Jim O'Rourke、Ensemble Zinc & Copperなど、数多くのアンサンブルや音楽家によって演奏されてきた。

これまでに Tzaddik、Hat Hut、Table of the Elements、Cantaloupe、Important、Choose、Drag City、Black Truffle などのレーベルから作品をリリース。

ソロおよびアンサンブルで、Whitney Museum、Maerz Music Festival、Angelika Festival(Bologna)、Le Guess Who? Festival(Utrecht)、St. John Sessions、Berghain など、ヨーロッパおよび北米各地の多くのフェスティバルや会場で演奏を行っている。

[Instagram](#) / [Bandcamp](#)

**Konrad Sprenger**(コンラッド・シュブレンガー)

Konrad Sprengerは、ベルリンを拠点に活動する作曲家／アーティスト／楽器製作者、Joerg Hiller(ヨルグ・ヒラー)によるソロ・プロジェクト。

パフォーマンス、インスタレーション、作曲の領域を横断しながら、ヒラーは独自に構築した機械・電子楽器を用い、リズムや調律のシステムを探索している。

近年のプロジェクトには、モーター駆動によって自動演奏され、連続的に再調律される電気ギターを用いたマルチチャンネル・パフォーマンスがある。

また、2017年以降はPhilip Sollmannとともに、大規模インスタレーション『Modular Organ System』を開発しており、これは伝統的なパイプと特別設計されたパイプを組み合わせたオルガン構造を持つオリジナルの楽器となっている。

長年にわたる主なコラボレーションには、Arnold Dreyblatt、Ellen Fullman、Oren Ambarchi、Rom、Ei、Ethnostress、そしてアーティスト・コレクティヴの Honey-Suckle Company との活動が挙げられる。

プロデューサー／エンジニアとしても、Oren Ambarchi、Arnold Dreyblatt、Ellen Fullmanらのソロ作品を手がけている。

彼の作品は、MoMA PS1、Gavin Brown's enterprise、Artists Space、KW、Hamburger Bahnhof、Berghain、Sprüth Magers、Kunsthalle Baden-Baden、Frankfurter Kunstverein、Kunsthalle Basel、Sonar、Primavera、INA GRM、Wiener Festwochen、ICA London などの美術館やフェスティバルで発表されてきた。

Joerg Hillerの録音作品は PAN、A-Ton、Schoolmap、Black Truffle などのレーベルからリリースされており、2001年に自身のレーベル Choose Records を設立して以来、Terry Fox、Walter Marchetti、Robert Ashley、Ellen Fullman、Robin Hayward、そして自身(Konrad Sprenger 名義)を含む多くのアーティストの作品を発表している。

[Web](#) / [Bandcamp](#)

**Joachim Schütz**(ヨアヒム・シュッツ)

Joachim Schützは、ドイツ出身のギタリスト、インプロヴァイザー、プロデューサー、レコーディング・エンジニア。1969年、南ドイツに生まれ、長くハンブルクで活動したのち、現在はベルリンを拠点としている。実験的作曲、集団即興、スタジオ・プロダクションといった領域を横断しながら活動を展開している。

1990年代初頭、Schützはドイツのアンダーグラウンドおよび実験音楽シーンに身を置き、やがてシュトゥットガルトを拠点とする自由形式のコレクティブ Metabolismusに参加。絶えず変化するメンバー構成やカセットでのリリース、そしてサイケデリア、ミニマリズム、ミュージック・コンクレート横断する即興的アプローチで知られる同団体の一員として活動した。

即興は、Schützの創作における中核的な要素である。即興アンサンブルSchlussの創設メンバーとして、ギターや電子音、オブジェクトが織りなす音の質感的な交錯を捉えたアルバム『28』を発表。また、Queller Trioでは、ブリペアド・ギター、フィードバック、ライブ・エレクトロニクスを用い、直感的なアンサンブルの対話を追求している。彼らの2024年作『Kiosk』は、形式と自由のあいだを行き来するその探求の軌跡を記録した作品である。

Schützのキャリアにおいて重要な軸となっているのが、Arnold Dreyblatt & The Orchestra of Excited Stringsとの協働である。改造エレクトリック・ギターとエレクトロニクスを用い、Dreyblattのマイクロトータルな調律体系の中で、リズムの推進力とハーモニーの彩りを担いながら、増幅されたエネルギーと構築的な精度とを交差させている。MaerzMusik(ベルリン)やMeakusma(ユーペン)といった国際フェスティバルに出演し、2023年には Konrad Sprenger、Oren Ambarchi、Arnold DreyblattとともにDrag Cityよりリリースされたアルバム『Resolve』に参加している。

また、Ellen Fullman、Pantha du Prince、Phil Niblock、Efdemin、Ja König Ja、Die Vögel、School of Zuversicht など、ジャンルを越えて多様なアーティストたちとのコラボレーションも行ってきた。

Joachim Schützの音楽は、作曲と即興のあいだに存在する。改造やブリペアドを施したギターは、フィードバック・システム、ライブ・エレクトロニクス、マイクロトータルな調律を取り入れ、構築的なアンサンブルと瞬発的なインプロヴィゼーションの双方で、精密さと偶発性を共存させている。その響きは、共鳴、リズム、ノイズのあいだに立ち上がる絶え間ない対話そのものである。

[Instagram](#)

**Jim O'Rourke (ジム・オルーク)**

1969年シカゴ生まれ。Gastr Del SolやLoose Furなどのプロジェクトに参加。一方で、小杉武久と共にMerce Cunningham 舞踏団の音楽を担当、Tony Conrad、Arnold Dreyblatt、Christian Wolffなどの作曲家との仕事で現代音楽とポストロックの橋渡しをする。1997年超現代的アメリカーナの系譜から「Bad Timing」、1999年、フォークやミニマル音楽などをミックスしたソロ・アルバム「Eureka」を発表、大きく注目される。1999年から2005年にかけてSonic Youthのメンバー、音楽監督として活動し、広範な支持を得る。2004年、Wilcoの「A Ghost Is Born」のプロデューサーとしてグラミー賞を受賞。アメリカ音楽シーンを代表するクリエイターとして高く評価され、近年は日本に活動拠点を置く。日本ではくるり、カヒミ・カリィ、石橋英子、前野健太など多数をプロデュース。武満徹作品「コロナ東京リアリゼーション」など現代音楽に至る多彩な作品をリリースしている。映像作家とのコラボレーションとしてWerner Herzog、Olivier Assayas、青山真治、若松孝二などの監督作品のサウンドトラックを担当。

[Instagram](#) / [Bandcamp](#)

**Eiko Ishibashi (石橋英子)**

石橋英子は日本を拠点に活動する音楽家。これまでにDrag City、Black Truffle、Editions Megoなどからアルバムをリリースしている。2020年1月、シドニーの美術館Art Gallery of New South Walesでの展覧会「Japan Supernatural」の展示の為に音楽を制作、「Hyakki Yagyo」そしてBlack Truffleからリリースした。2021年、濱口竜介監督映画「ドライブ・マイ・カー」の音楽を担当。2022年「For McCoy」をBlack Truffleからリリース。2022年よりNTSのレジデントに加わる。2023年、濱口竜介監督と再びタッグを組み「悪は存在しない」の音楽とライブパフォーマンスの為にサイレント映画「GIFT」の音楽を制作、国内外でツアーを行っている。2025年3月には、Drag Cityより7年ぶりの歌のアルバム「Antigone」をリリース。

[Instagram](#) / [Bandcamp](#)

【お問合せ】

プレスお問合せ先:

MODE: info@mode.exchange

プレスキット:

Presskit

ソーシャルメディア:

MODE公式Instagram:

<https://www.instagram.com/mode.exchange/>

【開催クレジット】

主催

MODE

協力

ゲーテ・インスティテュート 東京